

『既成概念から自由に』

男女共同参画が言われて久しいが、日本では中々進まない。男女の役割意識が依然として強く存在し、学術の分野でもそれは変わらない。「意識」は男女ともに容易に変わらないもののようなものである。ただし、変えたくないから変わらないのであって、変わろうとする意欲に乏しいだけの話であると思っている。キャリアを目指す者であれば、変わるべきは男性意識であると同時に、女性にも意識改革が必要であると常々感じることが多い。男女ともにいえることではあるが、プロフェッショナル、あるいはキャリアを築きたい者であれば、また、それを指導する上司であれば、双方ともに基本的に必要なことは、「社会通念からの脱却」であり、「予言の自己成就の排除」である。日本社会は、明治以来の家長制度の持続が基本であり、これを基盤に配偶者控除や総合職と一般職の区別人事制度や、「受付は女性の業務」、「女医」などという言葉が存在してきた。外国からみればまさに、日本組織はガラパゴス化しており、その基盤は武家社会を近代日本に持ち込んだサラリーマン社会であり、そこでは男女の役割は厳然として峻別され、神輿は軽い方が良いというトップが責任を取らないですむ組織である。当然、評価は情状的となり不透明となる。

男女ともに優れた人材を育成することは、我が国の最重要課題である。それには、上司が男女の意識をなくして育成し、透明性をもった公正な評価に努めることが必須である。公正な評価とは、男女、年齢、好悪の要因を排除した評価する姿勢であり、どのような若者でも何を期待されているかが分かれば、努力し続けるはずである。透明度の高い組織は結構居心地が悪い。従って、職場に居心地を求める人たちは効率の悪い働き方をする。居心地は家庭に求めるべきで、職場に求めてはいけない。新しい日本はこれを望むのか、ガラパゴスでいたいのか、今、丁度岐路にあるように思われる。